

男女若手共同参画委員会からの提言

(はじめに)

日本リウマチ学会(JCR) 男女若手共同参画委員会は、当初 2014 年 4 月、女性会員支援推進小委員会として発足した。学会員を対象に実施したアンケート調査の結果から、ロールモデルの提示を最優先課題として、活動が開始された。2015 年から委員会の名称を男女共同参画委員会と改名し、学術集会での活動(委員会企画シンポジウム・展示ブースでの特設コーナーでの講演会等)や、ホームページ上での女性医師キャリア継続ロールモデルの紹介を行ってきた。また、学会における各委員会委員数、学術集会の座長やシンポジスト、パネリストにおける女性の割合を増やす方向性に取り組み、女性医師の活躍の場が広がるように活動してきた。2019 年度からは男女若手共同参画委員会と改名し、女性に限らず若手が活躍できる学会作りに尽力を続けている。

他の学会に比べて委員会発足は決して早いわけではないが、各方面の理解やサポートもあり、順調に活動できていると考えている。

今回、小委員会発足から 10 年が経過した節目において、この 10 年でどのような変化が生じたかを踏まえ、将来に向けた展望も含め、委員会委員全員で議論を重ね、提言を作成したので報告する。

（検討項目別変化・考察）

① 会員数における女性比率について

2014 年度から 2024 年度にかけて JCR 会員総数は約 130 名の増加にとどまる一方、女性医師の数は約 500 名の増加が見られ、女性医師比率は最近 10 年で 13.7%→18.9% と 5.2% アップしている（表 1）。近年の女性医師のキャリアとして rheumatology の分野が選択肢の一つに挙がりやすくなっているのは喜ばしい。この女性割合は、日本の医師総数における女性の割合 22.8%(令和 2 年)を考慮するとリーズナブルな値である。しかし、世界の rheumatology 分野に目を向けてみるとヨーロッパ諸国では 30-90%を女性が占めており、若手女性メンバーが益々増えている。今後さらに女性医師の参画を促すため、明るいワークライフバランス/キャリア形成を描けるフィールドであることを感じられるように努力を継続することが必要である。

表 1：会員数の推移

	2014 年度	2024 年度
全体	9,363	9,495
男性	8,083 (86.3%)	7,703 (81.1%)
女性	1,280 (13.7%)	1,792 (18.9%)

（笹井蘭・松下功）

② 専門医数における女性比率について

2014 年リウマチ専門医は 4,735 名で、うち男性 4,183 名（88.3%）、女性 552 名（11.7%）であった。2024 年度には総数は 515 名増加しており、男性が 154 名の増加にとどまるものの女性は 361 名増加している。その結果、男女比は男性 4,337 名（82.6%）、女性 913 名（17.4%）であり、10 年間で女性の割合が 5.7%増加している（表 2）。

リウマチ専門医における女性の比率は会員数での女性の比率よりわずかに低い状態であり改善の余地はある。リウマチ専門医を取得すると、勤務先の病院あるいはクリニックに掲示することができ、患者数確保に貢献できるため、会員数の女性の割合と同じようになるよう、女性リウマチ医には今後も専門医取得に励んでいただきたい。そのためにも、専門医取得のメリットについてさらに広報していく必要がある。

表 2：専門医数の推移

	2014 年度	2024 年度
全体	4,735	5,250
男性	4,183 (88.3%)	4,337 (82.6%)
女性	552 (11.7%)	913 (17.4%)

（伊藤聡・松下功）

③ 評議員数における女性比率について

2024 年度における会員は男性が 81.1%、女性が 18.9%、評議員については男性が 87.7%、女性が 12.3%となっており、全体の比率から見ると女性の割合が依然として追いついていない。しかし、2014 年度における評議員は男性 92.7%、女性 7.3%であったことから、この 10 年間で女性医師の評議員の割合は 5%増加しており（表 3）、本委員会での活動が女性の参画増加に寄与していると考えられる。

これまで本委員会では、女性会員の育成と支援、職場環境の改善提言、ロールモデルの発信など学術集会を通じて行ってきたが、さらなる改善のために、評議員選出プロセスの見直しも検討の余地があると考ええる。多様性を重視した基準を明確化し、女性医師が立候補しやすい環境を整えると取り組みが望まれる。

表 3：評議員数の推移

	2014年度	2024年度
全体	899	1,031
男性	833 (92.7%)	904 (87.7%)
女性	66 (7.3%)	127 (12.3%)

(坪井秀規・松下功)

④ JCR の委員会における女性医師の比率について

JCR 各委員会の男性および女性委員の人数を、2013 年から 3 年ごとに分けて示し、女性の割合について以下に述べる。(表 4)

表 4：委員会における委員の推移

	2013～2015年度	2015～2017年度	2017～2019年度	2019～2021年度	2021～2023年度	2023～2025年度
男性	215	215	241	299	318	321
女性	24 (10%)	21 (8.8%)	27 (10%)	32 (9.7%)	47 (12.8%)	59 (15.5%)
合計	239	236	268	331	365	380

10 年前 (2013-2015 年度)、委員会の委員総数 239 名のうち女性委員は 24 名で、全体のわずか 10%に過ぎなかった。その後、男女若手共同参画委員会が発足し、学会年次総会等での積極的な活動を通じて、女性委員の数は徐々に増加している。

現在 (2023-2025 年度) では、委員会総数 380 名のうち 59 名が女性委員となり、その割合は 15.5%にまで達している。これは 10 年前と比較して約 1.5 倍の増加である。

一方、全体の男女比に目を向けると、女性委員の絶対数は依然として男性に比べて少ない状況が続いている。しかし、評議員における割合を比較すると、男性が 35.5% (321/904) であるのに対し、女性は実に 46.5% (59/127) と、女性評議員に対する委員の割合が男性を遥かに上回っている。このことは、母集団となる女性医師の専門医資格取得や評議員選出のさらなる推進が重要であることを示している。

今後は、女性医師に対して専門医や評議員資格の取得を積極的に促すとともに、委員会への参加をさらに推進する取り組みが求められる。

(岸本暢将・桃原茂樹)

⑤ JCR 学術集会における座長に占める女性医師の比率について

JCR 学術集会における座長に占める女性医師の比率について、2020 年から 2022 年のコロナ禍を除く期間をレビューした（表 5）。2016 年には女性座長の割合が 10.7%であったが、その後、経年的に増加傾向を示し、2023 年には 16.6%に達していた。2024 年には 13.1%と前年から若干減少したが、全期間を通じて 10%以上の比率を維持している。

一方で、女性医師全体の会員比率は 2014 年の 13.7%から 2024 年には 18.9%へと増加しており、演者における女性比率が 20%以上であることを考慮すると、学術集会において女性医師が座長として活躍する機会をさらに拡大するための取り組みが求められる。また、近年、教育講演での女性座長比率が低下する一方、ワークショップにおいては比較的高い割合を維持している点は、学会として検討すべき課題であると考ええる。

表 5：JCR 学術集会における座長の推移

（岩本卓士・金子祐子）

⑥ JCR 学術集会におけるシンポジスト演者の女性医師の比率

シンポジウムでは、近年のトピックや新しいガイドラインなど 1 つのテーマに対して数人のシンポジストがあらゆる視点から講演するため、登壇者は大学病院などの講師やその経験者が多い。すなわち、これまでの業績を集約した完成度の高い演題を発表するセッションである。ゆえにシンポジスト演者には診療だけでなく、コンスタントに教育や研究に携わるキャリアが求められる。2016 年以降年ごとにばらつきはあるもの、概ね女性医師の割合は 10～20%台となっている。(表 6)

現在 JCR では基礎研究推進委員会の J-STAR や国際育成セミナー小委員会などの活動が、リウマチ医の研究を大きく支援し、個々の活動の場を広げているのは確かである。それは性別に関わらず、本人次第で個性や能力を十分に発揮できる。そしてこの成果がシンポジストやパネリストにつながると思われる。

各個人のライフスタイルにおいては、何を重視しているかそれぞれ違う面があるものの、シンポジウムやパネルディスカッションなどの発表をきっかけに各個人の潜在能力を引き出す機会となる可能性が考えられ、今後もそのような場を提供できるよう学会として取り組みを続けていく必要があると考える。

(山口絢子・高窪祐弥)

表 6：JCR 学術集会におけるシンポジストの推移

シンポジスト数	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023	2024
男性	115	93	86	99	96	97	102	104	98
女性	5	26	15	13	12	13	8	26	30
女性演者割合	4%	28%	17%	13%	13%	13%	8%	25%	31%

⑦ JCR 学術集会における教育研修講演の女性比率について

2016 年度（第 60 回）～2024 年度（第 68 回）の JCR 学術集会における教育研修講演演者の男性・女性比率年次推移を表 7 に示す。

教育研修講演演者の総数は 2016 年度 28 名、2017 年度 26 名、2018 年度 25 名、2019 年度 27 名、2020 年度 26 名、2021 年度 27 名、2022 年度 26 名、2023 年度 27 名、2024 年度 30 名である。

学術集会全体の女性演者割合は比較的安定して 20 %前後であるが、教育研修講演演者の女性比率は 7.4%～16.7%で回ごとに変動がある。教育講演は専門性が高く、注目されている話題を取り上げることが多い。年度によって比率の変動が生じるため、女性比率の目標値を設定して取り上げる話題を調整するなどの工夫が必要かもしれない。演者が男性であれば、座長は女性を選定するなど、教育研修講演全体の男女比率を考えるなどの方法も考えられる。一方、学術集会全体の女性座長の割合は 2016 年の 10.7%以降は増加し、15%前後で推移しているが、教育研修講演座長の女性比率は回により変動がある。直近 3 年では 2022 年、2024 年は 0%、2023 年も 10%を割り込み、学術集会全体とも乖離が見られる。

座長はプログラムの進行における会場内の責任者の役割で、教育研修講演はより専門性の高い講演であるため、プログラムの分野に造詣が深い会員が選定されている。女性座長候補者リストを作成し、利用することで、教育研修講演座長の選定がしやすくなる可能性がある。

表 7：JCR 学術集会における演者全体および教育研修講演演者の推移

	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023	2024
全体・女性演者%	21.9	22.8	22	21.7	11.9	10.9	22.3	20.8	25.7
男性 (%)	85.7	92.3	84	88.9	84.6	92.6	92.3	92.6	83.3
女性 (%)	14.3	7.7	16	11.1	15.4	7.4	7.7	7.4	16.7

(下山久美子・高窪祐弥)

(まとめ)

JCRにおける女性支援小委員会の発足から現在の男女若手共同参画委員会に至るまで、10年が経過しているが、その間の変化について、主に7つの各項目について調査し考察してきた。全体としては、まだもう少し、今一步の感はあるものの、様々な意味での進歩も認められ、女性医師の活躍の場は広がってきていると考えられた。

厚生労働省では、男女共同参画社会基本法に基づき、第5次男女共同参画基本政策を定め企業における女性登用の加速化に係る成果目標の設定が閣議決定されており、東証一部企業役員の女性の割合の2022年目標は12%であったが、2025年目標として東証プライム市場上場企業役員の女性の割合を19%に変更されている。また衆議院・参議院議員候補の女性割合目標も2017年目標はそれぞれ17%、28%となっていたが、2025年目標は両者とも35%に引き上げられている。

一方、女性医師の割合は年々増加し、2012年時点では19.7%であり、特に若年層での女性の割合は高く、医学部入学者の約3分の1を女性が占めている現状がある。働き方改革など、医療界全体の変化が著しい今日、日本リウマチ学会においても、女性患者が多いリウマチ性疾患というフィールドであることもあり、さらに変革を迫られていると思われる。

「女性」「若手」にことさら言及することは、実際は本来の男女若手共同参画になっていない証しであるとも言われる。逆説的ではあるが、その言葉を使用しなくなる環境になることで、これらの問題は解決の方向へ向かうと予想される。今後も当委員会は活動を発展、継続していく所存である。

今後もJCR会員の皆様には活動を注視していただき、さらに女性医師、若手医師など、その置かれた状況・環境にかかわらず、様々な方向性で活躍できるようにご協力を賜りたい。

(中川夏子)

(参考資料)

世界の rheumatology 分野に目を向けてみると (Table1)、ヨーロッパ諸国では 30-90% を女性が占めており、若手女性メンバーが益々増えている。そうした世界の潮流からすると、まだまだ本邦の女性 rheumatologist の数は伸びしろがあるはずである (ただし、諸外国では、医師総数に対する女性医師の割合も日本よりはるかに多い (図 1))。今後の JCR の維持・繁栄においては、若手女性医師の rheumatology への参画が大きな力となると考えられ、明るいワークライフバランス/キャリア形成を描ける field であることを感じられるようにする努力を継続することが、肝要であろう。

RMD Open. 2022 Aug;8(2):e002518.

Table 1.

Estimated percentage of women in academic rheumatology by country, data from national society leaders based on various sources, 2020 or the latest available year

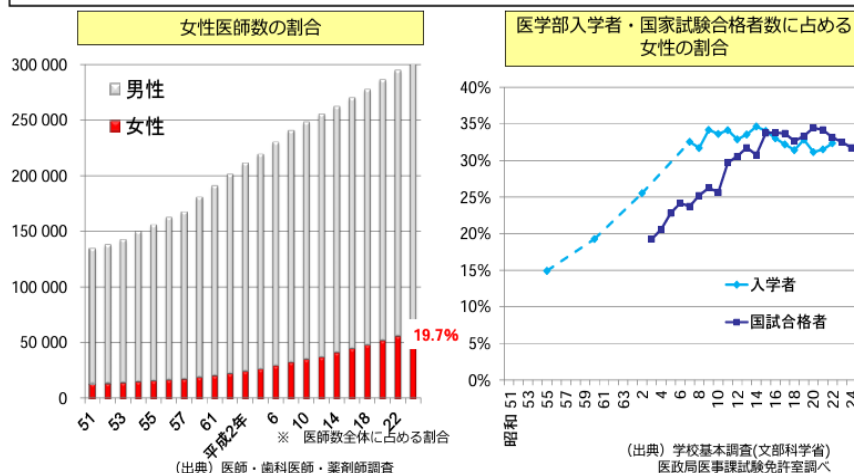
Country	All qualified rheumatologists	All academic rheumatologists	Early career academic rheumatologists (postdocs)	Mid-career academic rheumatologists (assistant/associate professors)	Senior academic rheumatologists (full professors)
Albania	n/a	n/a	n/a	n/a	0%*
Austria†	29%‡	31%*	48%*	13%*	20%*
Belgium (Flanders)	65%*	n/a	75%*	50%*	10%*
Germany	43%‡	35%*	65%*	25%*	10%*
Greece	44%‡	29%‡	72%‡	50%‡	11%‡
Hungary	60%*	10%*	40%*	30%*	10%*
Italy	52%‡	43%§	n/a	53%§	8%§
Lithuania	91%‡	85%*	99%*	90%*	80%*
Netherlands	61%‡	59%‡	n/a	n/a	33%‡
Spain¶	48%‡	40%*	75%*	41%§	5%§
Switzerland	28%‡	35%*	n/a	25%*	0%*
Turkey	50%*	30%*	50%*	50%*	10%*
UK	60%*	30%*	n/a	n/a	n/a

図 1

女性医師の年次推移

参考資料3

- 全医師数に占める女性医師の割合は増加傾向にあり、平成24年時点で**19.7%**を占める。
- 近年、若年層における女性医師は増加しており、**医学部入学者に占める女性の割合は約3分の1**となっている。

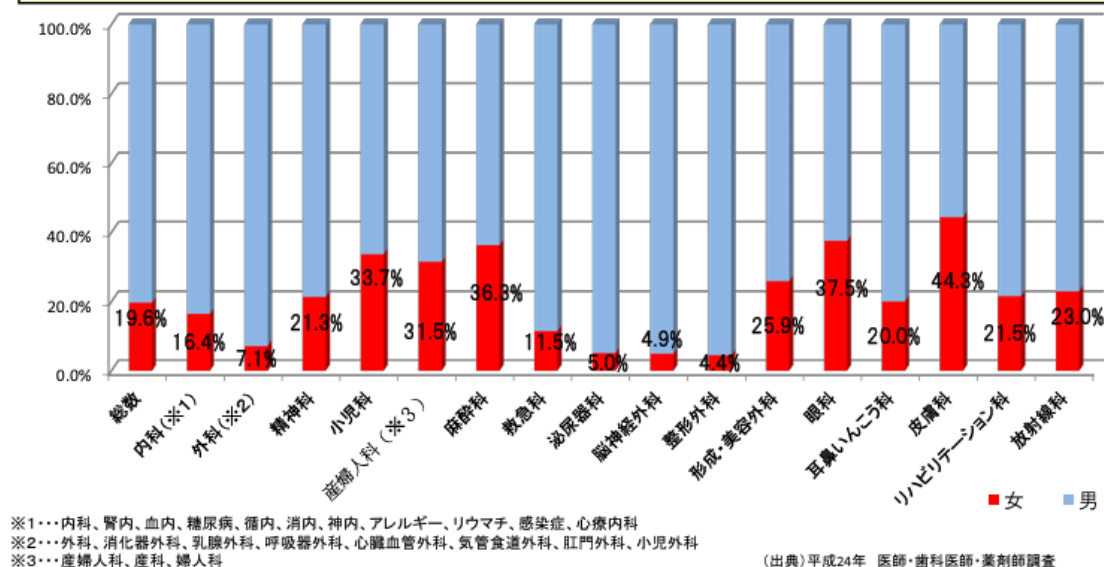


各国の女性医師の割合(%)



平成24年 診療科別 医師男女比

- 医療施設従事医師数の女性割合は19.6%であり、22年の18.9%と比べて増加している。
- 皮膚科や小児科、産婦人科といった診療科では女性医師の占める割合は高いが、外科や脳神経外科などの診療科では、非常に低い。



(笹井 蘭)

参) 学術集会における他学会の状況

1) 日本循環器学会

2024 年 会員総数 27362 名、女性会員比率 14.0 %。ダイバーシティ推進委員会の女性循環器医コンソーシアム(JCS-JJC)部会で、女性の座長登用を推進するために、女性会員および若手男性医師(45 歳以下)を対象とした座長候補者リストを作成している。「初めての学会座長の手引き」を作成し、広く活用を呼びかけている。女性座長比率は 2021 年大会で一般演題 38.8 %、一般演題以外のオンデマンド 17.2 %、ライブセッション 10.4 %、全体 25.2 %。

2) 日本医学放射線学

会員総数・女性会員比率不明。2020 および 2021 年の総会の座長を務める女性の割合は低く、総計 10%に満たない状況。2021 年度より、座長の女性比率 20%を目標とし、女性候補者リストを作成（ダイバーシティ・働き方改革推進委員会、JCR、専門修練施設からの推薦により随時更新）している。

学術集会運営への参画の推進・連携のために、教育委員会が 2021 年 6 月に「学会座長の手引きーはじめて座長席に座る前にー」を作成している。

2022 年秋季大会以降、教育講演においては 20%~41%、一般演題は 32%~34%、2024 総会では女性座長割合は教育講演 43.6%、一般演題 18.3%となった。

3) 日本泌尿器科学会

2023 年 会員総数 9722 名、女性会員比率 8.9 %。2021 年に女性座長比率を 3%以上とすることを要望の一つとして提案。実現のために指導医資格を有する女性会員を対象に座長候補者リスト（掲載の諾否、専門分野、保有資格についてアンケート調査を行い）作成している。リスト作成後にすべての総会において、女性座長数が 3%以上を達成した。リスト掲載の不承諾の理由は、「現在の状況では受諾が困難」、「学会座長に興味がない」、「回答者自身の能力不足」、「自信がない」、「座長ができるレベルにない/身の丈を超えている/恐れ多い」、「性別による優遇を受けたくない」などがあったと報告されている (<https://www.urol.or.jp/society/gender/questionnaire-survey.html>)。

「恐れ多い」、「座長のレベルにない」、「自信がない」といった理由で辞退が相次ぎ選定に難渋した経験がある。座長の手引きなどは、他学会の報告を見ると、一定の効果が期待できる可能性があると感じた。

(下山久美子)